

吃音と生きる

— 百万人の知られざる苦悩

近藤雄生
ノンフィクションライター

1976年東京都生まれ。東京大学大学院修了後、5年半にわたって世界各地を旅・定住しながらルポを執筆。08年に帰国。著書に「遊牧夫婦」「中国でお尻を手術」「終わりなき旅の終わり」など。

言葉がうまく出てこない。それが、どれほど人生の重荷となるか。自身も吃音者だった著者が、原因も治療法も不明の「病」を抱えて生きる人々を追った。

マリリン・モンローには知られざる悩みがあった。彼女の姉は、マリリンについてこう記す。

《……慣れ親しんだ事柄を話しているせいか、ノーマ・ジーン（マリリンの本名＝筆者注）の口調が自信に満ち、流暢になつてきた。その間はつまることもなかったが、時折言葉がつまる癖は滞在中ずっと続いていた。……》（『マリリン・モンロー わが妹、マリリン』、バーニス・ベイカー・ミラクル、モナ・ラエ・ミラクル共著、大沢満里子訳）

マリリンには、吃音、すなわちどもりがあった。幼少期、孤児院にいたころに

どもるようになり、その後もずっと吃音は彼女を悩ませ続けた。あるインタビューで彼女は、一〇代のころの吃音の経験を思い出し、告白する。

「本当に辛かったわ。いまも緊張したり興奮したりするとどもることがあるの」彼女を特徴づけるあの吐息を漏らすような妖艶な話し方も、吃音が関係していたらしい。息を吐きながら話せばどもらない。若いときにセラピストにそうアドバイスを受け、試してみたら確かにどもらなかつた。そうしてあの話し方が出来上がった——とも言われている。どもっているのが映像ではわからない

喉に鍵がかかったように硬直してその語を発することができなくなる。特に自分の名前のように、言い換えのきかない言葉をおうとするとなつた。だから電話や自己紹介がうまくできなかつた。またたとえば、電車で乗り継ぎの切符を買うために目的の駅名を告げなければならぬときは（以前は口で言う必要がある場面が多かつた）、言うべき駅名が言えないので一度改札を出てから券売機で切符を買った。ファストフード店に行つて「てりやきバーガー」を買いたいと思つたと、「て」が言えない。そのため、注文する段階になつて「えっと、あの……」としどろもどろになりながら、思わず「チーズバーガー」を買ってしまったことも数知れない。

吃音は、幼少期に概ね二〇人に一人の割合で起こるといふ。そのうち八割ぐらゐは成長とともに自然に消えるが、消えずに残つていく場合がある。その結果、どんな集団にも概ね一〇〇人に一人の割合で吃音者がいると言われる。日本ではざつと一〇〇万人以上が吃音を抱えてい

る。二〇一三年六月、東北地方の某病院。「では、会社に電話をかける練習をしましょう。私が会社側をやりますね」言語聴覚士がそう言うと、向かいに座る井上康夫（仮名）が言う。「……は、はい」。言語聴覚士が普通の半分ほどの極めてゆっくりとした口調で始める。「はい、〇〇（〇〇会社名）で、ございます」呼吸を整え、ゆっくりと一語一語をかみしめるように井上が話し始める。「もしもし、わたくし、〇〇課の、井上

ることになる。程度の差はあれど、決して少ない数ではない。しかし、その原因ははっきりせず、これといった治療法もない。当事者以外からはその深刻さが見えにくいこともあり、正面から扱われることは多くない。吃音者が置かれている現状を多くの人に知ってもらいたい。それは自分自身にとつての問題でもあつた。その思いがこの取材を始めようと思つた一番のきっかけだつた。

一本の電話をかけるために

二〇一三年六月、東北地方の某病院。「では、会社に電話をかける練習をしましょう。私が会社側をやりますね」言語聴覚士がそう言うと、向かいに座る井上康夫（仮名）が言う。「……は、はい」。言語聴覚士が普通の半分ほどの極めてゆっくりとした口調で始める。「はい、〇〇（〇〇会社名）で、ございます」呼吸を整え、ゆっくりと一語一語をかみしめるように井上が話し始める。「もしもし、わたくし、〇〇課の、井上

からといって彼女の悩みが小さかつたとは決して言えない。マリリンは三六歳で死んだ。その直前、精神的に不安定な状態でもあつたのだろう、未完の遺作となつた「Something's Got to Give」の撮影の際には、どもつて台詞が言えないこともあつたとされる。彼女の死はいまも謎に包まれているが、吃音が関係していた可能性はないとは言えないと私は思う。周囲にはわからずとも、吃音はそれほど本人にとっては大きな悩みとなりうるからだ。私自身、そうだつた。

私は高校時代から吃音に悩まされるようになった。ある言葉をおうと思つたのですが、人事課の、××さんを、お願いします」

「はい、××です。調子は、どうですか？」

「言葉の件は、少しずつですが、よくなつて、きて、います。復職の件で、面談を、お願いしたいの、ですが……」

「では、来週の月曜日はどうですか」

「はい、大丈夫、です」

数人しか入れないほど狭く、窓も何もない遮音室で、井上は、何度もこうした練習を繰り返した。一回終わるたびに、「いまは、比較的、うまく、言え、ました。病院だと、うまく、言え、るのですが、でも、本番になると……」などと言つて、少し笑つた。ときどき唇を震わせて、「あの、あの、あの……」と何度も口を動かし続け、数十秒にわたつて同じ音を繰り返すこともある。穏やかに優しげな表情が、そのときだけは苦しうにゆがんだ。

井上は現在五〇歳。妻と一人の息子がいる。幼いころから吃音に悩まされ、治そうとこれまでいろいろな方法を試みた。

地元の高専を卒業後、東京なら吃音治療も進んでいるのではないかと東京に就職し、夜間や日曜日に民間の治療院に通って催眠療法を受けた。吃音への効果を期待して七〇万円もする高周波治療器を買ったこともある。しかしいずれも役には立たなかった。

現在の勤め先は精密機械の部品などを扱うメーカーで、そこでエンジニアとして二〇年間働いてきた。吃音に困りながらもなんとかやってきたものの、〇八年に所属長になり、会議など人前で話さなければならぬ機会が増えて以来、状態は悪化していった。精神的にも追い込まれ、うつ病になり、〇九年、親の介護も重なったため一時休職した。復帰後、所属長から外れて他部署に移ったものの、状況は好転せず、一二年の秋に再び休職することになった。すると会社の人事課長にこう言われた。

「治さなければ、正社員から契約社員になって軽作業をやってもらいます」

契約社員になれば家族を養うことは難しい。それに数年後に契約を打ち切られしやすい言葉を選び、隠すことに必死だった。どもったらどうしようと思う気持ちが頭から離れるときは一時もなかった。特に電話はどうしてもうまくできない。こんな状態では就職は難しいだろう。そう思い、就職することを断念した。そしていろいろと考えた挙句、海外をふらつきながらフリーでライターをしようと決めて、私は長期の旅に出ることにした。旅をしながらもずっと吃音はついて回った。取材のための電話をかけなければならぬときなど、いやでたまらなくて前の晩から眠れなくなることもあった。かけるときは、受話器を持って呼び出し音を聞きながら歌を口ずさんだりして、気持ち最高潮に盛り上げる。かけ終えるといつも疲れ切つてぐったりした。

だが旅に出て二年半ほどが経ち、二九歳で中国に住んでいたとき、大きな変化が訪れた。ある一週間ぐらいい境に、急にもどらず話せるようになったのだ。そしてそれから一、二年の間に吃音はほとんど完全に消えていった。理由はわからない。ただ、吃音から解放されるかも

て諦めさせられる可能性もある。井上はどうしても吃音を治さなければならなかった。

うつ病は治療によって順調に回復した。そしてその病院からの紹介で、吃音治療のためにこの病院にやってきた。吃音を専門にする数少ない医師がいるからだ。

最初に病院を訪れたころ、井上の吃音はこれまでにないほどひどくなっていた。自分の名前を言うだけで一分も二分もかかってしまう状態だった。

私が井上に初めて会い、遮音室での電話の練習に立ちあつたのは、それから五カ月ほどが経つたころのこと。訓練の結果が少しずつ出ているようだった。

「最初に来たときは全然違いますよね」

医師も言語聴覚士も、また井上自身も口をそろえた。そしてこの日、復職に向けて人事課長との面談のポイントをとるために、この場で実際に会社に電話をすることになっていった。この電話でありどもるわけにはいかない。だから、たった一本の電話のために、マニュアルま

れないと思つたとき、自分の第二の人生が始まるような気持ちになった。

その後ここ五、六年、吃音の症状はなくなっているが、しかし完全に治つたとは思っていない。何かの拍子に戻つてくることがあるかもしれない。そうした不安はいまも時折襲ってくる。

井上がいま、どんな思いで電話をかけているかを想像しながら、吃音に苦しんでいた時代の記憶が生々しく蘇つた。

……数十分が経ち、遮音室から井上が出てきた。

「なんとか、できました。緊張して、つかえ、つかえに、なって、しまい、ましたけど」

ゆつくりとそう言って、ほっとしたように彼は笑つた。

原因も治療法もわからない

ひとりで吃音と言っても、症状は多様だ。大きくは三種に分かれる。「ぼ、ぼ、ぼ、ぼく」のように繰り返す連発性、「ぼーくは」と伸ばす伸発性、「……(ぼ)くは」と出だしなどの音が出ない

で作って何度も練習をしなければならなかったのだ。

「では、これから会社にかけるので、ちょっと外にいてもらってもいいですか」そう促され、私は部屋の外に出た。遮音室は、ドアを閉めると外からは何も聞こえない。廊下の淡い緑色の長椅子に座り、井上が出てくるのを私は待った。

一〇分経つても二〇分経つてもドアは開かない。うまくできたのだろうか。私は、井上が必死に電話口で話す姿を想像しながら、喉のあたりが息苦しくなる吃音独特の感覚を思い出した。自分自身長年苦しんできたあの感覚を――。

旅の途中に訪れた突然の変化

高校時代からじつに一〇年以上、吃音は私にとって最大の悩みでありつづけた。そんな自分を変えたくて、浪人時代には心療内科のカウンセリングに通った。大学に入ってからは、精神的にタフになれば吃音などなくなるのではないかと、一人旅にも行くようになった。しかし何も変わらなかった。人前で話すときは話

難発性。連発性が一番吃音と認識されやすいものの、連発から伸発、さらに難発へと、症状が進展していくことが多く、一般には、難発がもっとも進行した状態だとされる。

緊張してスムーズに話せなかったり、話すときに「かむ」といった誰にでもあつる現象と同等に考えられることも少なくないが、吃音には明らかな断絶がある。喉や口元が強張って硬直し、どうしても動かなくなる特有の感覚を吃音者は知っている。

なぜ吃音が起こるのか。そのメカニズムはわかっていない。体質と環境の双方が要因であること、脳機能が関係しているらしいこと(吃音者は、脳の左半球が低活動な一方、右半球が過剰に活動しているという)が知られている程度だ。

吃音を扱う医師は少なく、基本的には、言語聴覚士が治療に当たる。しかし前述の通り、これといった治療法があるわけではない。自身も吃音者であり、吃音を専門的に扱う言語聴覚士である羽佐田竜二氏はこう話す。

「吃音治療は、いまのところ『職人技』になってしまっています。吃音を専門とする言語聴覚士が、各々が正しいと思う方法で、それぞれの目の届く範囲でやっているという状況なのです」

しかし、その『職人技』に頼ったとしても、成人してから吃音が完全に治るということはほとんどないのが現状だ。

二〇一三年夏、障害をテーマとしたNHKのバラエティ番組『バリバラ』で、吃音を取り上げられることになった。私は、番組に出演する人に直接会いたいと思いい、大阪で行われるという打ち合わせと収録に同席させてもらうことをお願いした。その打ち合わせの場で知り合ったのが高橋啓太だ。名古屋から来ていた三五歳の男性である。

人の良さそうなのにこやかな笑顔が印象的な高橋に挨拶に行くと、彼は、苦しうに顎を上にあげながら「あ、はい……、あ……あの」と繰り返した。自らの名前を言い出せずにいる彼を見て、その吃音の重さが垣間見えた。しかしその一方、打ち合わせと一緒に来ていた彼の三歳の

娘が高橋が話しかけるのを見たとき、私は胸が締め付けられるような思いがした。「トイレ、行かなくていい？」

高橋は別人のようにスムーズに、一切どもることなく話していた。娘さんに対してはどれももらないのに、他の人に向かっではほとんど自由に言葉が出ない。しかしそれは決して、単に緊張などの問題で説明できるようなものではない。そこに吃音という問題の難しさがある。

収録のとき高橋は、無機質な機材に囲まれた広いスタジオの中で、たびたび言葉を詰まらせて、ときに水中から顔だけ出して必死に呼吸しているような苦しげな表情になりながら、カメラの前で自らの状況を懸命に話した。ただでさえ話すことが容易ではなく人前ならなおのこと苦痛だろう高橋が、テレビを通じ全身で吃音とは何かを伝えようとしている姿に胸を打たれた。

番組はいいものに仕上がっていた。吃音という問題の本質が、当事者の口から、そしてその姿から、よく見える番組だったと私は感じた。カメラは高橋の職場に

う、ことは、あり、ました」

番組には、高橋が自ら番組のホームページに書き込みをしたことがきっかけで出演を依頼された。悩んだが、吃音を持つ知人に言われた言葉で出演を決めた。

「重度な吃音者が、表に出てくることだけで意味がある」

高橋の吃音は、確かにそれほど重かった。

物心がついたころからどもっている。三五年の人生の中で、自由に話せたという記憶はない。高校ではクラスメイトに吃音をからかわれ、耐えられずに中退した。そのときの怒りはいまでも消えていない。そしてそれから何年にもわたって、家に引きこもった状態で誰とも話さずに生活してきた。

「高校、をやめて、から二年間、ぐらいは、何もしないで、過ごし、ましたが、そのあと、姉の紹介で、ドーナツ屋で、バイトを始めました。夜一時〜朝七時まで、の仕事で、前の日の、後片付けとその、日の、朝売る分の、ドーナツを作るんです。みなが帰ったあと、自分一人

も入り、彼が働く姿も映していた。工作機械の板金加工などを行う会社で高橋は、ときにコミュニケーションの難しさがありながらも、しつかりと働き、同僚から信頼を得ている様子が伝わってきた。

私は打ち合わせで会い、番組を見て以来、高橋のことが気になった。ツイッターのつぶやきを見ると、その後も彼が日々苦悩しているらしいことが伝わってくる。自分とは吃音の程度も違うし、彼の苦しみがどのくらいのものかは想像することしかできない。直接話を聞きたかった。そう思い、一〇月、高橋に会いに名古屋に行った。

吃音と生きてきた三五年

高橋の車の助手席に乗り、一〇年以上ぶりに見る名古屋の風景を眺めながら、最近はどうですか、と私は聞いた。すると高橋は、握ったハンドルの上に少し顔を上げるようにしながらこう言った。

「じ、じつは、か、会社を、辞め……、なんです」

番組で紹介され、彼が順調に働いてい

でやるので、誰とも会わないで、よかったです。だから、バイト、している、といってもいつも一人で、引き、こもっているのと、同じような状態でした」

高橋は、人と話す必要のないその仕事が好きだった。だが、五年ほど続けたあと、母親が居酒屋を始めることをきっかけに辞めて、母を手伝うようになった。しかしその新たな仕事は、長くは続かなかった。

「二年ぐらいいしたら、母が、がん、になっちゃって……。見つかったときは、もう手遅れの、状態でした」

母親は闘病生活に入り、居酒屋は閉めた。そのため高橋は、引越屋や工場の派遣工員といった職を転々としながら暮らすことになった。そうした生活が五、六年も続く間に現在の妻と結婚し、娘も生まれた。そして三二歳になったころ、いよいよ家族のためにより安定した仕事に就かなければと職業訓練校に通った末に見つけたのが、先の会社だったのだ。

母親は職業訓練校に通っている頃に亡くなった。高橋の両親は早くに離婚して

いて、彼にとつて母が唯一の頼れる親だった。だが、その母とも、最後まで、彼の吃音について話をしたことはなかった。ただ、母が自分の残りの時間が少ないことがわかったところに、ひと言だけ言ったという。

「『ごめんね』って。それ、だけが、唯一の、吃音についての、会話、でした。つ、辛かったです……。そんな、こと、言わ、ないで、ほしかった……」
カフェの席で高橋は、声を絞り出すようにしてそう言った。

出口の見えない苦悩の中で

二〇一三年九月、再び東北地方の病院を訪れた。

三カ月ぶりに会った井上は、随分状態がよくなっているように見えた。思わず私は言った。

「井上さん、すごいスムーズになりましたね。六月と印象が全然違いますよ」

「最近、調子のいい日は多いんですけど、いい日と悪い日の差が大きいです。病院だと言葉が出やすいんですけど、本

ために転勤ができないといったことも響いたようだ。残りの一社は面接にまで進めることは決まったが、まだ受かるかはわからない。

翌週井上は、復職を前にして、働ける状態にあるかどうかを再度確認するために会社が指定した産業医の診断を受けることになっていく。復職の日取りまで決まっているので形式的なものだとも考えられるが、井上は、産業医の前で話すことができるのか、強い不安を抱いていた。この日の井上の話しぶりを聞いてみると、大丈夫なようにも感じたが、決してそんなに簡単ではないことを井上が誰よりもわかっている。

「自分は、あと、一〇年は働かなければ、ならないんです」

息子が独立するまでの学費はなんとか出せそうだが立っているが、家のローンの返済があと一〇年はかかる。休職する時も収入をどうするかが最大の悩みだった。そして最悪の場合、死ぬしかないと考えていると井上は言った。

「自分が、万一死んだら、葬儀はこうし

番(会社など)ではやっぱり話せないんじゃないかって不安はあるんです」

このときすでに、面談は無事に終わり、会社へ復職することが決まっていた。復職の日は一週間後に迫っていた。ただ井上は、元の会社に戻ることに積極的になれずにいた。復職して元通りに働けるとしても、吃音が治ったわけではない。結局、吃音について理解してもらえないわけではないだろうし、またこれまで通りに話すことを求められればいずれは同じことになる……。

井上は、障害者として扱われることを望んでいた。いまの状態で健常者と同じように扱われるのは辛いと言った。日本では一般に、吃音によって障害者と認定されることはほとんどないが、井上は担当の医師に、障害者手帳を取れるようにしてもらえないかと相談した。そのことについて、医師は私にこう言った。

「一般論としては、自分も、吃音で障害者手帳を取る必要はないと思っています。でも、井上さんの吃音はとても重度だったし、仕事や生活の面でも本当に困って

てくれ、ここに連絡すれば、保険が給付される、といったことを、休職中に、ノートに、書いておきました。正社員に、戻れなくて、収入が、なくなったときのことを考えると、そういうことも、考えざるを得なくなります」

*

吃音は苦しい。言葉がうまく話せないのみならず、原因がわからず、理解も得にくいということが、当事者の苦悩を想像以上に大きくする。高橋もまた、一時期本当にギリギリの状態だったことを覚えてくれた。

「私は、高校を、中退したあと、一七歳のとき、自殺、未遂を、したことが……あり、ます。ビルの、八、階から、飛び降り、たんです。でも、下に、草の茂みが、あって……。死ぬ、な、なかつたんです。こないだ、北海道で、吃音を苦しめ、自殺、した、という人の、ニュースが、あり、ました。その人や、自分以、外にも、すれすれ、の人は、多い、はずですよ。仕事に、就け、ない、人などに、対して、打、開策が、ないん、です。そうした、

いたから、診断書を書くことにしたので

「その結果井上は「言語機能の著しい障害」があると認定され、このときすでに障害者手帳を手にすることができていた。ただ井上は、復職する会社には、障害者手帳を取ったことを伝えるつもりはないと言った。それは、会社に障害者を受け入れる枠はあるものの、そもそも電話の応対ができない人は対象外だとされてきたからだ。元の会社には健常者として戻るしかなかったのだ。

だから井上は、会社への復職のための準備を整える一方で、障害者枠で受け入れてくれる他の会社の求人に応募していた。会話補助装置も手に入れていた。タブレットPCに文字を入力すると音声が出るというものだ。

「元の会社に戻るより、できれば私は、障害者枠で新たな会社に入りたいんです。最初から障害者として扱ってもらった方が、私は安心して働けると思っています」

障害者枠で六社を受けた。そのうち五社は落ちた。年齢の問題、家族の状況の

人たちに、対して、早く、なんとか、しないと、と思つて、います。自分も、妻と、子、どもが、いな、ければ、いま、ここには、いないと、思います」

高橋の苦悩は、いまでも大きい。しかし、ただ下を向いているだけではない。会社を辞めた後、どうしても治したいという強い意志を持つようになっていた。

言語聴覚士の指導を受け、毎日ひたすら訓練を続ける。自分自身が吃音から解放されたいことはもちろんであり、家族とともに生きていくためでもある。だが、それだけではない思いもある。

「こんな、重度の、自分でも、治るんだって、いう希望を、他の、吃音者たちに、与え、たいんです。それしか、いまは、自分に、できること、を、思いつかないんです」

訓練を始めてまだ間もない。効果を云々言える時期ではない。だが高橋は、きつと治ると信じている。その視線の先には、彼と同じく苦悩する無数の吃音者の姿がある。その一人ひとりに、語りつくせぬ物語があるにちがいない。